

学生ボランティアによる非行少年の立ち直り支援に関する検討

- 京都 BBS 連盟における「ともだち活動」を通して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
岡原 圭佑

昨今では、非行少年に対して地域による支援や支援の連携が指摘されるが、具体的にどのような連携をしていけばよいのかはさほど明らかになっていない。そこで、非行少年の立ち直り支援を行っている京都BBS連盟の活動に注目し、その中でも保護観察所と連携し保護観察中の少年を対象にした「ともだち活動」の実際を取り上げ検討した。「ともだち活動」は保護観察所より依頼を受け、会員が少年と一緒に遊ぶ・勉強を教えるなどしながら継続的・個別的にかかわることを通して少年を支援する活動である。かかわる会員は、主に大学生であり、このことは京都BBS連盟の特徴ともなっている。BBS会員は少年に対して兄・姉のような立場から少年のよき理解者・相談相手となろうと努めるのだが、依頼に基づいた活動・支援活動・保護観察中の少年を対象とするなどの性質を持つ関係であるため、「ともだち活動」だからこそ生じる葛藤や悩みを会員は抱きやすい。その悩みや葛藤とは具体的にどのようなものであろうか。それらの葛藤を会員はどのようにして乗り越えるのだろうか。その経験から支援においてどのような視点が必要だと感じたのだろうか。これらの事を整理することを通して、BBS会員は保護観察官・保護司と具体的にどのような連携のあり方が求められるかを検討した。「ともだち活動」経験会員を対象にインタビューを行い、そのデータを「かかわり当初に見られた悩み、葛藤、不安」「関係形成のための工夫」「少年との関係において必要だと思われる視点」に分類した。さらに、「少年との関係において必要だと思われる視点」においては、支援において必要だと思われるが、同時に会員に葛藤を生じさせるものが含まれていたため、「ともだち活動が抱える難しい点」として特別に取り上げ考察した。「かかわり当初に見られた悩み、葛藤、不安」として、3通りに分けられる『人為的關係という壁』、『保護観察中の少年とかかわることの不安』、ともだち活動に対する『強い責任感と義務感』がまとめられた。「関係形成のための工夫」としては、少年と自然に接点を持つための『活動へのお誘い』、閉鎖性の高い『交換日記を通じた積極的な自己開示』、『交換ノートを紹介したやり取り』、『楽になる話をする』、『会う回数を増やし気兼ねない関係を目指す』、『遊びを導入する』工夫が行われていた。「少年との関係において重要となる視点」として、会員からの『積極的に自己開示』の必要性、『少年だからと構えない』ことの気づきの重要性がまとめられた。「ともだち活動が抱える難しさ」としては、よき理解者・相談相手を目指す一方で、支援目的の人為的關係であるため『近づきすぎず遠すぎない距離感』が求められることが会員に対して葛藤を生じさせていた。連携のあり方に関しては、活動開始当初で会員と少年双方への説明・合意システムを持つ、会員対象の活動研修を行う、活動上のルールを明確にし、会員少年双方が認識する場を持つ、守秘義務の扱いを検討する、事例検討を行うなどが考えられた。